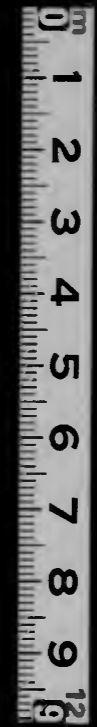


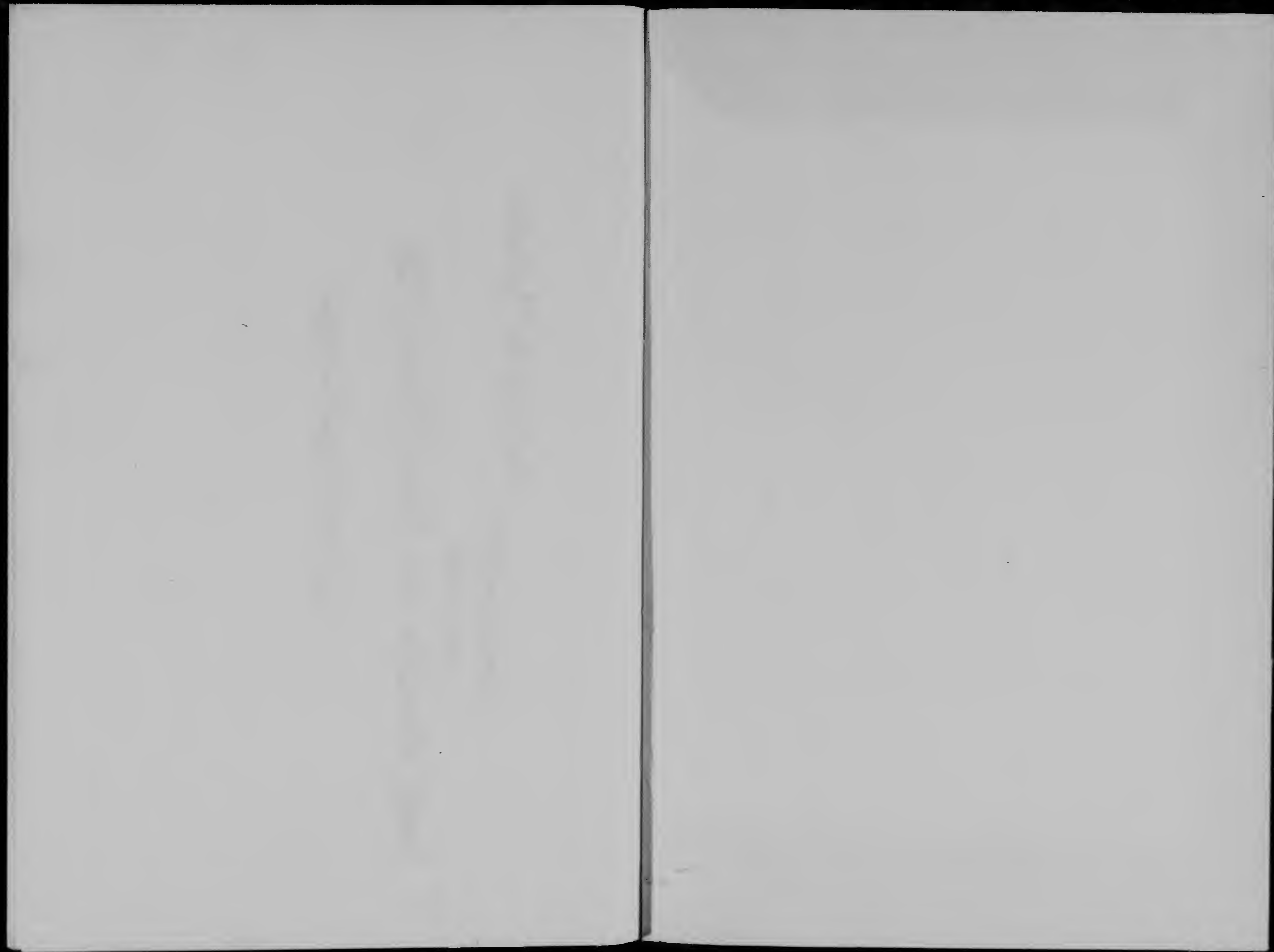
新濟善抄卷

三



| | |
|------|---------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 32569 |
| 冊數 | (217) |
| 函號 | 394 |
| | 152 121 |

| | | | |
|------|-----|------|----|
| 内閣文庫 | | | |
| 架 | 冊 | 號 | 類 |
| 五二四 | 三九二 | 三三二九 | 和書 |



元文元^辰年十月十日

大田伊集右衛門在表子

拂方沖知戶

新沖善太保弥三郎組 四右衛門 大田忠兵衛好實

宝曆元^未年七月廿日死

元文元_辰年十月十二日

中根玄庵(安樂堂)願

大井玄酒井紀伊守組

新井善左衛門三郎組
公方 中根權六車堅

宝曆八_亥年正月十四日死六十歳

元文元^辰年十月十二日

松平次直の忠陸忠子

大洲吉井と名に与組

新洲藩大久保弥三郎組

三言後

松平七十郎陸尚

後三言後

後勅十帝

元文三年九月三日跡目二百八十後

是迄の二百後かうく奉承

寛延二年三月廿日解入樂田七左衛門支配

安永二年十月廿九日致仕圓樂と云

天明四年正月十日死八十一歳

元文元_辰年十月十日

田沢平十郎心室子

小十人細井友重(重)組

新沖書之保弥之席組 言儀 田沢平十郎心房

同日智のうち又十俵と足し一俵より
作と家系

宝曆九年十二月十日十とせうろ

宿座よこれ智先なり月ハとて黄令_二

也法_二

明和七_寅年四月廿七日老辞賜黄令_二及入役樂
言九信_二支配

同年^宣六月十六日死七十歳

元文二年^宣十月廿三日

山本次郎左衛門正言三曾孫

西元新津藩松平格勅祖

新津藩松平格勅祖 三信 山本次郎正言

宝曆三年^宣十月令^宣 子實一治也

宝曆四年^戌二月廿日老辞賜黄金^二入川勝

九系支配

明和三年^戌十二月十九日致仕

明和六年^子三月廿六日死

元文二年十一月廿三日

田邊右衛門惟昌書

西丸新沙坂松本格筋

新沖書太保三席組 四席後 田邊忠四席尚昌

宝曆八年四月十日拜入金田主殿支所

宝曆九年十二月八日致仕了意云

明和五年七月三日死七十三歳

寛保二^戌年八月七日

荒川八郎清親幸願

元方印納

新洲番太保正三郎組

四番
七斗

荒川八郎清親友

寛保三^亥年八月十七日死三十三歳

寛保二^戊年八月七日

山本元庵の正清嫡孫兼祖

山本元庵の通称

正清の養子

新井藩太政大臣

三官

山本元庵正清正房

延享二^丑年八月廿七日葬入竹中周防守支配

宝暦六^子年六月十三日死

寛保二年八月七日

西尾後正師正庸忍辰

大洲藩井上重成守辰

新洲藩大久保弥三郎組 二百俵 西尾助三郎正辰

後二百石

延享三年九月三日海目六百石

是中その二百俵はうへへてある

明和六年七月廿日死又十七歳

延享元_子年十二月十日

渥美平兵衛親義惣領

西丸中御所

新洲番松系八雲浦組 二百石 渥美平兵衛親政

延享二_寅年十二月十日 拜入 柴田七左衛門 支配

明和二_戌年十月晦日 相奉託 二百石
以下 沙没金取集 及 沙没浦取 及 意帯
沙没令之 免_子取
安永五_申年十月 沙没令取集之
免_子取

天明四年四月廿二日西城の坊子
河内番之頭

寛政七年五月廿二日老祥賜賞

金^二入武田河内守支配

享和二年 月 日死八十一歳

延享元年十一月十二日

野々山法源左衛門三男

大井出青山海茶子祖

新井番松平公常祖 四石 野々山彦右衛門兼幸

寛延元年十一月廿二日入樂田七九番の
支配

宝曆二年六月九日大井出奉行中
左京祖小入

延享二年十月十六日

小林平衛門正沅殿

元方御細戸

新洲藩松系八雲藩組 言儀 小林平衛門正房

同日替はうら又十後と呈し
作とす

宝曆九年正月八日於死又十二歳

延享三^亥年十月十六日

長祿庄^三助志願

元方^三印^三印^三印

新洲青松^三志願^三通

宝曆^三亥^三年四月廿九日死^三年^三案

延享二年十月十六日

酒井極之助豊忠教願

拂方沖加戸

新沖藩松本八雲傳祖

三言 酒井極之助實久

同日替れうち又十條と是し
作とさるる

宝暦元未年三月廿日死

延享三^寅年十一月十六日

去^左屋^右新^左之^右照^左虎^右方

榊方^中和^方

新^左津^右書^左松^右茶^左八^右益^左信^右組

三^言幸^右若^左 去^左屋^右新^左之^右照^左虎^右方

明和二^酉年十二月十七日^辭入^山口^益庫^支配

明和^三年十二月十九日^致仕^信松^茶八^益信^組

と云

明和八^卯年七月二日^死入^十茶

延享二年十月十六日

采市と座英傳慈願

榊方沖知戸

新沖藩松本公儀組 三信 正木新茲幸時

同日勢のうらみ十俵と足し一り

三信

明和又子年十二月廿二日挿入毒本平四郎支配

明和六年八月廿日致仕髪と利とて

龍井と云

安永八年二月六日死

寛延二年八月廿二日

横地中助之賢之男忠順

大津甚右衛門守直

新津藩之南豊系守組

晋左衛門 横地大十郎之孝

日言平後

改中助

寛延三年三月廿日大向宗村涉浪
の村より列して皆申ありハ時後ニ
と結ミ

宝暦又三年十月廿日大向四右衛門
涉浪の村より候して皆申ありハ
時後ニと結ミ

宝暦十二年二月廿九日大向涉浪の

討手小加多川で時後ニと経る
宝暦十二^末年三月八日大の沙流の
討手小列し時後ニと経る

明和三年三月九日新津番組既

明和七年五月六日未^レ辰奉

日光の沙流と常々^ニと経る

安永又申年四月日光の沙流

随^ハ

寛政三年十二月七日老禪^ニ共合

及^ニと経ると追及^ニ系支^ニ配^ニとな^ル家

寛政四年八月廿八日死七十七歳

寛延二年八月廿三日

日後八師在^ハ大迫^ニ曹慈順

大津番酒井^ニ飛澤^ニ組

新津番^ニ高豊^ニ系^ニ守組^ニ 日後八師在^ハ忠之

寛延二年三月廿日大の沙流討

沙流の討手小列し時中^ニと経る

時後ニと経る

宝暦元^末年九月十八日大の沙流の

討手小列し時後ニと経る

宝暦又^ニ申年十月廿二日大の日本討

沙流の討手小加多川で時後ニと経る

宝曆六年正月十日涉弓場始免の
射多不達りて時被^ニと^ニ居^ルの十日
宮中より召して^ニ黄令^ニと^ニ居^ル
宝曆七年二月廿日死二十七歳

寛延二年八月廿三日

津友左利初表子

大津友左由進守組

新津藩戸田豊茶守組 三言 津友左利初

明和四年十二月廿六日永田町めて
居^ルの地と居^ル

安永三年三月十六日死又十四歳

宝曆二申年四月四日

富田左衛門良久願

大津町山崎修理屋組

新洲藩元田豊永舟組 言奉 富田忠左衛門勝久

明和二年九月四日死六十一歳

宝曆二年四月六日

四月四日不出版

吉田左仲順成喪子

本州有馬後古祖

新汗番南豊前守組 三言後 吉田新次郎忠英

宝曆五年十二月廿八日評入八木十三席支配

明和三年三月 日神田旗籠

所りの火災あて下谷長者町の

郵敷火小うゝ家

明和六年十二月四日致仕正山

と云

宝曆二年七月四日

冒日冒下病不出候

横山侍之助重貞参上

大津守有馬俊成守祖

新津藩之田豊永守祖 三石 横山龟吉正平

改基在左

宝曆三年四月十九日辞入田中出羽守支配

宝曆七年七月十六日大津守有馬

英濃守组参上

宝曆四年四月廿日

清野全庵の貞直書す

西九洲初戸

新洲書元田豊茶守祖

言 清野全庵の満奏

月十後

同日勢のうらみ平後と足らぬ
作とあり

安永元辰年二月廿日
あま津田之河所三丁目新道乃
郵敷少少のり六月廿七日
終了

安永又申年四月日光の清佐小徳ハ

母去金三十一と信了

天明七未年六月二日死七十歳

宝曆四戌年四月廿六日

福王勤助信美忠子

南蛮大紙系守組

新洲藩南豊系守組 言儀 福王勤助信義

同日誓のうらみ十俵と足し給ふ
作とのあつ

宝曆六子年十一月廿二日青山権田
系の火災より居所郵敷火まかつり
安永六申年四月日光の湯供に過り
母去金三十一と信了は於今甲子十四年一誓
給ふて

安永六年十月廿四日死六十五歳

宝曆四年四月廿日

之田坂之助正賀茂子

大津郡中根大隅守組

新津藩戸田豊永守組 音若 正田忠次席安盛

明和乙子年七月十日辞入松平米馬奴支配

明和八年十二月七日致仕

安永乙申年十月廿日若子二三席

安信礼心一七欠之家子一八九六

實家三田家(屋)

寛政三亥年九月廿日死

宝曆六年二月廿九日

新刊番元田豊永守組

田邊又七郎良親吉子

大津市山崎理亮組

田邊作次良貞
内七十倍

宝曆十三年三月廿八日の沙汰

の対多小候して時後ニと後了

安永二年三月十八日の沙汰の

対多小加多月て時後ニと後了

安永三年十月十二日の沙汰

の対多小列して時後ニと後了

安永又申年四月日光の御供也

志のこころ

安永六十年二月廿二日大御沙後の
討ふに續して時後ニと経つと
天明四年九月晦日大御沙後の
討ふに加りて時後ニと経つと

寛政四十年十月廿一日死六十一歳

宝暦六年二月廿九日

菅沼之居吉久惣領

大押友水野肥系守組

新沖藩三田豊系守組

三田

菅沼吉久

宝暦七年九月十日拜入田中出羽守支配

宝暦十三年二月各居郵敷

火に引かす

明和六年四月十日奔津安輪系
紀伊守組小入

宝曆六年二月廿九日

秋山信房政保惣願

本町奉行信濃守組

新井藩高井家守組 三意儀 秋山信房(政長)

同年十月十九日湯村涉後町にて

器物^ニと給^リ

宝曆九年四月廿六日於一葉

涉後町にて器物^ニと給^リ

同年十月 日同一葉涉後町にて

明の日記中に記されてある^ニと

給^リ

宝曆十一年十月廿九日狩野清
河川て明の口言申おるに
英令二と給ふ

宝曆十二年四月十二日狩野清
河川て明の口言申おるに
英令二と給ふ

明和元年四月十二日同業清
河川て明の口言申おるに
英令二と給ふ

明和三年十月十日狩野清
河川て明の口言申おるに
英令二と給ふ

明和四年四月廿六日同業清
河川て明の口言申おるに
英令二と給ふ

明和八年四月十日死年十六歳

宝曆七年十二月廿日

依系勅左衛門良高惣願

大御方右衛門亮鑑

新中書少丞系孫七郎組

二信 依系七後良寧

後百子信

同日惣免此うち又子信と是しあふ

作とあり

宝曆八寅年十月四日源目四百子信

是迄の二百信ハ之ノ一御家

明和二年六月晦日死四十七歳

宝曆七年十二月廿二日

日向守之助正勝惣願

大津守久世長門守組

新沖藩少監系孫七郎組

三音後日向守六郎正孝

改正在馬

宝曆八年十一月九日陸羽沙院

河川で明の十日暮申小石を以て

賞金_二と給ふ

宝曆九年四月廿六日お前一葉

沙院有て瑞物_一と給ふ

宝曆十年十一月十二日お前一葉

沙院あつて明の十二日暮申小石

百三として英令根と終系

宝曆十二年二月廿九日の涉読
の対多小加り川で時後ニと終系

同年四月十二日跨対涉読ありて
瑞物ニと終系

同年十月三日大的涉読の対多小
加り川で時後ニと終系

同年同月十日跨対涉読ありて
明の十二日當中ニと終系

と終系

明和元年申年四月十二日ニ終系
涉読ありて瑞物ニと終系

明和二年十月廿六日の涉読乃
対多小加り川で時後ニと終系

明和三年十月十二日跨対涉読
ありて明の十三日當中ニと終系

英令根と終系

明和四年二月廿九日の涉読乃
対多小候ニと終系

同年四月廿六日跨対涉読ありて
瑞物ニと終系

明和又子年二月十四日の涉読乃
対多小加り川で時後ニと終系

明和八年二月廿六日跨対涉読

何月て器物^ニと法^ニ

安永四年十二月廿六日 拜入 長野外記 支配

天明六年四月八日 致仕

寛政七年六月廿七日 髪を剃て

一箱 堂云

宝曆九年三月廿九日

富永菅直(車籠懸願)

元方沖地戸

新沖菅直系孫七席組 三言依 富永織部車籠

宝曆十二年六月廿九日 祐屋、岩井

宝曆九年三月廿九日

青木右兵衛義豊書

西尾所行

新津藩少監系源七郎組 二條 青木又四郎義英

同日惣代うち又十條と足しあふ
作とさふ

寛政十一年七月廿八日位老祥賜賞金二枚入

赤川織部支配

同日系徳儀中守高久相后沖書付
とと川て初任位と目と年法
老妻まで惣代一奉なり目ハ

之位小二百俵と生涯流るる事
 義典貴の家督ハ形ハなる事
 なることく嫡孫兼祖のこと
 行ハ形ハ一奉ハ心の悔ハ事
 屋一と作出さ家一奉ハ心の悔ハ事

 かくのふとさ倒あつたゆりも年老をきて替りて
 以て此御を去と祥して二夜出さばふ事
 行ハ形ハ一奉ハ心の悔ハ事
 家督と嗣つてさあつたゆりも年老をきて替りて
 親小のさうしてさ年々の苦小むるゆりも
 唐年二百俵と流るる事
 事こと御恩と三河也

宝曆九年三月廿九日

坂市七衛正長惣願

大御方松平伊勢守組

新井藩少監系孫七郎組 三章後 坂部五郎左衛門正重

後松平

同年四月廿六日湯村涉境ありて
 瑞物ニと流るると又杖なりは八年毎
 二夜く出て恩賜少ありは次八十
 同年十月 日宝曆十年十月
 十日湯村涉境ありて菅仲小助の
 百さして必貴令ニと流る
 宝曆十一年三月八日湯村也

心とを——なぬよりして三階粟毛
と云御馬と御書ありの作とありと
胸料もりさるれありし出さる也
同年十月廿九日勝対沙流有て
明の口書中にさうれて黄令二枝と書
宝曆十二年二月廿九日大的沙流
の対多不列して時後二と書
同年十月十日勝馬沙流河川て
明の口書中にさうれて黄令二枝と書
宝曆十二年二月十日吉田馬場
ありし御書流滴馬の対多不列し
同年十月廿七日書中にさうれて黄令三枝

と書

同年十月十六日明和元申年十月
十七日明和二年十月廿六日明和元
年十月十二日明和四年十月十八日明
和五年十月九日明和六年十月二日
明和七年十月十日明和八年十月
十日安永元年十月十日安永
二年十月十日勝対沙流河川て
明の口書中にさうれて黄令二枝と
書
安永二年十二月六日西菅西丸
透りし御書流滴馬の対多不列し

後々多野留同月十日當中に
有る事にて時後ニと信家

安永三年十月十日安永四年
十一月十日跨野留同月十日
當中に有る事にて英令ニと信家

安永八^中

二年二月五日西九洲船奉行

同年同月十日是迄年所跨野
留野留と信家
領事あり所の有戸席乞の御馬
ニと信下ニと信家

同年十二月 日乃不芳阿とと
西城丹有る事にて英令ニと信家

是よりと年毎ふかりし次

安永八^亥年四月十六日統免下りて

永井監物支配と信家

天明元^丑年四月廿四日西城の御馬
奉行

天明二^寅年十二月十四日乃不芳
阿とと英令ニと信家
是よりと
年毎不世恩賜の事

天明六年^{己未}年十月廿日御本城
石連ら包

同年十二月十六日常に乃不芳
阿とと英令ニと信家

天明七年十月十八日駒場野
御狩の侍騎馬と習免

寛政二年八月廿七日秋分乃

はくく相列茅野(湯治の湯唯

と免す也)八月廿九日秋分乃

寛政六年八月十六日本年

小金御狩の侍騎馬と令りせり也

明の卯年三月廿日御狩場めて

御巡見の侍候と習免す也騎馬

習免す也

寛政七年八月七日光の御

禮の秋分と免す也(九月廿二日

お禮十七日御免

寛政九年八月廿日老祥黄令_ニと

賜りて坊田主膳支配とせり也

同年同月廿三日死七十二歳

正徳小治_ニ御の恩賜少治_ニ次

先時服七物_百羅紗_ニ黄金

九十_八白浪_板卷物_二野駒_六めて至

双の御恩と_しは_し

三月廿九日在病不出候

宝曆九年五月十八日

三日之席番由三心敷願

大所出敷平修守組

新中書少丞系孫七席組

三音奉右三田初又席均南

月百奉儀

後又席番

宝曆十年十一月十二日拜入三田初十席

支配

宝曆十三年十一月十二日大所番

山口修理亮組小入

宝曆十一年八月三日

林右助政信嫡孫兼祖

林宗宗信政信孫

西元新法政高井飛澤守祖

新井番有馬宗女組

三石
三石
七合之文

林惣云信政寛

宝曆十二年三月廿三日老律賜黄金二枚入

山口氏於支配

明和元申年十月十七日死七十二歳

宝曆十一年八月三日

大村友直の言を以て

西元新津藩より舟乗御書

新津藩久松忠次郎組 言奉る 大村玄助高政

宝曆十二年十一月十二日移入高力式部支配

安永元 辰年四月十日致仕

安永八亥年四月四日死七十六歳

宝曆十一年八月三日

中川教馬志澄題

栗新井友言并飛澤吉

新井書久松忠次師祖

言者

中川惣右衛門忠要

口卒依

後市助

宝曆十一年七月二日甥武茂彦孫三郎

忠父孫忠秀盈之身病とありせし

ら月て死罪ふなり是に宿座と止免

ら是九月十三日免う

宝曆十二年十二月十二日西丸新新井友

芝山小笠原祖

宝曆十三年八月三日

坪内玄幕候定其子

新津藩有馬宗女組

兎新津藩有馬宗海守組

八名 坪内玄幕在定船

宝曆十三年十二月十日西丸組新津藩芝山

小笠原組

宝曆十一年八月三日

本村友九郎元真終願

西丸新津邊野口路組

新津藩有馬宗女組

七百五拾
四斗余

本村孫次郎元孝

宝曆十一年十一月十日西丸新津邊太之保

友九郎組

宝曆十二年^未年四月十八日

松浦八重と希捨也歟

大所敷丸房近江守組

新御番久松忠次郎組

云右

松浦八重と希捨尚

安永元^辰年六月十八日拜入神尾善徳守

支配

安永^申年十月廿六日死回十一歳

宝曆十三年四月十八日

因平御系尚書子

小入系承旨松沼

新御書久松忠次御祖

四世

團

安藤(系保)

明和元_申年三月廿六日大御沙院
の対子に候しつ時後二と候也

安永二_乙年七月十四日死す

明和三年二月十四日

三田重隆(並雅忠)所

大田重武(並義守)所

新洲藩津田日向守組

七喜

戸田藤三(並忠孝)

明和四年二月廿日大田沙流所

対子(凡列)之時後(三喜)所

明和八年二月十四日死(三喜)所

明和三年八月廿日

新井藩津田日向守組

小林平次 宿願
御腰物方
百五
日向

小林平次 宿願

同日惣持うら百俵を呈し
作さるる

安永申年四月日光の御供

春合 御供

安永七年二月晦日死又十四歳

明和三年八月廿日

萩野長十郎

小主人

新津藩津田日向守組

百九十九

萩野小左衛門清字

同日誓のうらみと後とをうらみ
作とある

安永四年四月日光の沙汰小左衛門

寛政元年 月 日宿屋二十年

欠好きとの作とある

寛政二年七月九日沙汰浦番三郎

寛政六年十月六日

若君の涉方御宮系の涉用と智光
——とて白根七と涉系

寛政十年年十月九日死

明和六年四月二日

依野安房守庸壽二重忠辰

元方御御戸

新井清少系總殿助組

音石 依野六十席運傳

後六太衛

同日替れうら平後と定しり
作とるなり

同年十月初日大の涉後の対手小
列して時後ニと後と

明和七年四月廿二日草麻涉後
あつて器物ニと後と

安永元辰年二月廿九日大の涉後の

対子ふ加り列で時後ニと給ふ
安永二己年正月十日沙弓場始れ
対子に列して時後ニと給ふ明の
十日當中に召さして英令ニと給ふ
安永二己年十月十二日大的沙後の
対子に列して時後ニと給ふ
安永四未年九月廿日大的沙後れ
対子に列して時後ニと給ふ
安永六申年正月十日沙弓場始れ
対子に列して時後ニと給ふ明の
十日當中に召さして英令ニと給ふ
同年四月日光の沙後れ列めく

小宿割と替ひ色八金^畔と給ふ
安永六己年十月廿九日小松川の邊へ
御放鷹の時沙後らに候し中川
丸蒔めく^羽対留十日當中に
召さして時後ニと給ふ
安永八亥年正月朔日中里めく
才的沙後有て^{瑞物}ニと給ふ
天明二亥年正月十日沙弓場始れ
対子に列して恩賜なく明の十日
當中に召さして時後ニと給ふ
天明八申年二月十二日大的沙後の
対子に列して時後ニと給ふ

寛政四子年六月十二日死五十七歳

明和六年四月二日

依之布衣十席利久貴子

大御前本堂住持守祖

新洲藩小室系總教祖

三信

依之布衣長尾利澄

同日替のうらみ五十俵と云ふ
作の家系

解入神尾

若狭守支配

安永三年八月七日致仕

寛政七年七月十三日出奔

明和六^丑年四月二日

山中後進時生題

小十人少系系書題

新津藩少系總教頭 四日後 山中後進時福

明和八年五月廿四日牛込の郵敷火

あかし

安永四年四月廿八日祥入久留藩教馬支配

寛政五年十二月廿日致仕

明和六年四月二日

母兄少帝及年終願

小十人久野修清組

新井清少丞系經殿助組

四信 安見七之助道香

明和八年^卯年二月廿六日死二十一歳

明和六年四月二日

是令十帝忠信忠臣

西元十八年四月二日

新洲藩少室系總領助祖

言後 國 伊右衛門忠壽

同日誓のうち二十條と定し一の條と
す

安永元年二月廿九日目黒の火災
ありて下谷屋敷坂の郵敷火災ありて
安永又申年四月日光の寺僧は酒ひ
りてハ務料とて白浪若千と云ふ

天明七年十二月廿六日大坂御所を以て

天明八年三月十二日沙比島英全
時後ニシテ

寛政六年三月廿日輝入山劫常
支配

同年十二月廿九日六十九某

明和八年六月十四日

东条源次郎長馬也願

西尾沖納戸

新沖清心堂系遊教助組 台石 東条小弥太長祇

政源重
信濃守

明和八年六月廿九日西尾沖小納戸

同年十二月十六日布衣巻と免さじり

安永元年三月廿九日大納戸統

あつて瑞物ニシテ

安永八年四月十八日一統免さじり

奇合不列寸

天明元年四月廿日沖小納戸

同年五月十八日

若君の御方(属々々)

同年七月廿六日(名原源重)と改元
了の六年(五月十七日)御方(石連
ら)

天明八申年十月十八日小落の邊

御放鷹乃と幾多射と免(うは)

同日廿二日時後三と終

寛政十年(二月)毎

豊三郎君の御方(御方)と免

三月九日老物三と終

享和元年(六月十三日)西場

御旗大馬(うま)と小馬(うま)と道

と御方(御方)と伊豆守(伊豆守)と信明(信明)

智(ち)と巴(は)と(巴)と終

西場(西場)と終

享和元年(九月十日)叙爵(叙爵)と終

信濃守(信濃守)と改元(改元)

御方(御方)の御方(御方)と終

文化元年(七月)朔日

樂宮(樂宮)の御方(御方)と終

系(系)の御方(御方)と終

終(終)と十月(十月)と終

廿七日(廿七日)と終

ついでに時後ニシテ
文化二年 月 日 率六十三案

明和八年六月十四日

梶平吉正書願

大津藩に在る事

新津藩小笠原系總教祖

言者

梶 大次郎正典

安永元 辰年正月十日 沙石場始末
の對子に列して時後ニシテ流るの
十日言中より言りて是令板ニシテ流る
安永二年三月十八日 大津藩にて
時後ニシテ流る
安永四年九月廿日 大津藩の
對子に列して時後ニシテ流る

安永六年四月日光の沖供ふ瀬ハ
燃去合ニ午酉と終る

安永六年正月十日沙ら場始光の
射多し列し時後ニと終る唯の午酉
言中ふらふもして亥合ニと終る

安永七年二月十日大的沖流有て
時後ニと終る

天明三年正月廿七日大的沖流の
射多し候し時後ニと終る

天明四年正月八日日本下川の遠く
所放鷹のとれ沙流ら候し後流の
入口あり菱喰射留回月九日言中に

石よりして時後ニと終る

同年九月晦日大的沖流ありて時後
と終る

天明七年二月六日大的沖流の射多
ふ加りて時後ニと終る

天明八年二月十二日大的沖流有て
時後ニと終る

寛政三年四月十九日死年九歳

明和八年六月十日

本多宗女老門懸願

新井藩御世長口書組

新井藩小笠原總殿助組

三言 本多彦八郎藏門

安永元辰年二月廿九日大御沙流の射

子に列して時後ニと給家

安永四年八月廿七日御入奥田兵衛守支配

天明元辰年正月十日沖三場路の

射子に列して時後ニと給家と明此

十二日當中に居りて美合ニと給家

天明元辰年五月十日西城の行沙流

松平但馬守組入

